

音

の ま に ま に

Music Life

SEVEN

今回のエッセイは、木村奈保子さんとも親交の深いフルーティストワルター・アウアーさんが登場します。実はアウアーさんは、木村さんがデザインしたフルートバッグNAHOKの愛用者。それがきっかけで来日のたびに演奏会を訪れたり、話をしているそう。アウアーさんは今号の巻頭インタビューに登場しましたが、巻頭とはまた違ったアウアーさんの言葉を木村さんが引き出してくれました。

高いモチベーションと深い探究心に溢れる演奏のために

映画の仕事で、出演者や監督にインタビューする機会は多かったが、実は、魅力のないアーティストに会ったことがない。

何故なら、エンタイナーはそうでなくてはならないし、一般人とは別の環境に生きているから面白い。決して清き美しい心をもつ人ばかりではないが、たいてい自分がたずさわる音楽や演技について、よく考え、それが血となり肉となっている。この特殊な環境こそが、魅力的な存在を作り上げていくのかもしれない。

東京芸術劇場ほかで行なわれた“ウィーン・ヴィルトゥオーゼン”（別途、今号にレビューあり）は音の美学にとりつかれたウィーン音楽家による一級のエンタテインメント。

技術、熟練、アイデア、解釈、そしてエモーション……余韻がいつまでも残る演奏会だった。

人は、そこにアートがあろうとも言葉を通して、より理解を求める。アーティストは、作品発表以外のところでも自分の言葉、解説により、ファンの要求に答える努力を惜しみなくしている。

私は、良い音楽に言葉は要らないと思うジレンマを抱えながら、アーティストの言葉を聞く。



今回第73回目を迎える“ウィーン・ヴィルトゥオーゼン”。コンサート前に、ワルター・アウアー氏と話す機会があった。

本番前の時間で、彼の中にエキサイト感があふれているのが感じ取れる。今回の選曲で、アウアー氏がもっともテーマとしているのは、モーツァルトである。

「モーツァルトを良い指揮者とオーケストラで演奏するのは、確かに慣れている。しかし、このメンバーのような10人編成や、あるいはソロのときなどはかなり集中力を必要とする。常に緊張とチャレンジの連続だ。それにしてもぼくは、モーツァルトが好きで、何度もなんどもチャレンジしているが、

満足したことは一度もない。もっと他のアプローチはなかったか、といつも後からどんどん別のアイデアが浮かんでくる。決して、満足しないが、同時に決してあきらめない」

ベテランで完璧に見える演奏者こそ、音に対する謙虚さも半端ではない。

より良い音楽を求める話は、終わりのない旅だろう。

“コンサートの生演奏”と“録音”の違いについて、本物の音楽家は、必ず言う。

「それは、別物だ」

アウアー氏もまた、生演奏へのこだわりを命を賭けていると感じさせた。

「まったく、全然違う！ 録音はマイクに向かうだけ。マイクを通して表れる音だ。妥協の繰り返しだね、この作業は。歌手にとってもそうだと思うよ。部分的に修正はできるが、録音のやりなおしは、そこで何もクリエイティブしない。しかしコンサートはライブ。生きた音だ。演奏者の肉体の調子も感情も異なるし、ホールや観客など、環境の影響をも大いに受ける。プロはモチベーションをキープするが、オーディエンスのエネルギーが伝わると、より一層ダイナミックな空気になり、そこで新しいサウンドが生まれる。生演奏は、一度も同じ演奏はないんだよ。そこが凄い。だから、演奏者は、いつもオーディエンスと一緒にステージを作るものだとぼくは考えている。ツアーで同じ曲を演奏しても、異なった結果や印象になるのは、そういうことからだ」



「FRANZ&KARL DOPPLER CON BRAVURA」【TUDOR7174】
アウアー氏と、同じくウィーンフィル首席のカール＝ハインツ・シュッツ氏とのドップラーのアルバム



写真：林喜代種

2014年10月に来日したウィーン・ヴィルトゥオーゼン。日本ツアーでは芸術性の高いコンサートを聴かせてくれた

巷に流れる大音量と録音技術で散りばめられたアイドル歌手の騒音が商業システムによって作り上げていく話とは、真逆の世界である。文化や芸術をポップにしようと、音楽家もプロモーターも常に努力している。

しかし、音楽ビジネスに走る輩は、金融業者も真っ青の勢いで、ただ音楽を壊していくようでさえある。

自分にとって音楽とは何か、についてアウアー氏は簡潔に表現した。「音楽は美の本質。音楽は危険で楽しいもの。そして、音楽は何度も繰り返して、作り上げていくもの。ぼくにとって音楽は、人生であり、情熱の賜物だ。家族の次に、大切なものだよ。音楽と家族……人生はこのバランスを保つべきだとぼくは思っている」

そう言えば、アウアー氏は大学で教えることから、アウアー式音楽学校を創設する計画があることを小耳に挟んだので、それを聞いた。教えることに、それほどエネルギーがあるのだろうか？

「教えるということは、演奏することに匹敵する素晴らしいことのひとつだ。教えることにより、再認識することが多く、自分も学ぶことができる。特に学生はいい。アマチュアだが、若さゆえモチベーションが高い。それこそが、まず演奏をする上で最も大事なことだろう。モチベーションは年齢とともに低くなりがちだが、それをキープする力を持っているのがプロだ。僕らは、経験とともにアイデアが溢れ出てくるし、チャレンジがやめられないから、モチベーションは下らない。

それと、良い生徒は、受け身ではなくアグレッシブで探究心が強い。理想の音を目指して、どのようなアプローチをすればよいのか、僕達と同じように考えている。だから、こちらにも挑発されることがある。アントレプレナー？ ぼくに学校の経営能力があるかどうかはわからないが、やはり音楽の向上を目指して、自分のアイデアでやってみたいんだ」

「どんなコンサートをやりたいか、は良い質問だ。若いうちはプロモーターの提案通りに与えられた企画と曲で自分なりの演奏方法、アイデアを鍛錬して、掘り下げていくということを行なってきたけれど、いまはもう、40歳を超えた。経験を積んできたから、本当に、コンサート全体のアイデアが浮かんでくる。確かに、自分のプランでコンサートをやってみたいね。オーディエンスと一緒に作り上げる演奏会に責任をもつためにもオリジナルのプランをやるべきだろう。例えば、ロック時代の20世紀音楽をフルートで。ロマンチックなコンポーザーと組んでみたいね」

次回アウアー氏を日本に招聘するとき、彼の独自のアイデアをぜひ、披露してもらいたい。そして舞台の空気を最高のものにするため、ただの受け身ではなく、高いモチベーションと深い探究心のもと、演奏会に参加してみたい。

これがオーディエンス側の挑戦というものだろう。



Information

NAHOK (ナホック) 新作のご紹介

リュック式 ダブルケースガード

最近、スコブリーフより若干大きく、唯一B4譜面が入るWケースがフルーティストの間でも増えてきたようです。

アウアーさんは、NAHOKスコブリーフとフルートケース/アマデウスの愛好家ですが今回は新作のブロンズグリーンがお気に入りとのこと。

リュック式 ダブルケースガード (フルート対応) [Gabriel/wf]

(外寸): 縦32cm × 横49cm × 幅9.5cm (内寸): 縦31cm × 横48cm × 幅8.5cm (重量): 930g

(カラー): クリーム/キャメル、ブラック/シルバー、マットブラック、ブロンズグリーン/ブラック

*フルートH管まで余裕で収まる幅で、B4譜面対応です。

*重量はショルダーベルトを含まないものです。

*実際はマチ幅11cm～12cmくらいのハードケースまできれいに入ります。

<http://nahok.ocnk.net/product-list/371>



愛用のNAHOKのブリーフケースを持って



木村奈保子

映画評論家、作家、演出家、NAHOKデザイナー。京都外大卒業。CBC局アナから映画評論家へ転身。

ゴールデンタイムの映画解説を17年間勤め、同時に演出家としてテレビ番組やファッションビデオの制作や、著作、講演なども多数手がける。昨今は、映画音楽の演奏活動やプロデュース、ダンス舞台の演出ほか、画期的な楽器ケースを研究開発、デザイン。文化的かつ、アントレプレナー(企業家)の資質で活躍する。 www.kimuranahoko.com/